

The Record by an Old Guy in the world of Virtual Reality Massively Multiplayer Online

とあるおっさんの VRMMO活動記



椎名ほわほわ
Shiina Howahowa

11

ライナ

ダークエルフらしく色気たっぷりのおねーさん。トイの義理の妹でもある。

トイ

エルフの長老の娘。無口で物静か。

スー

ダークエルフのメイドその3。あらゆる属性を扱えるサ・魔法使い。

シーシャ

ダークエルフのメイドその2。魔法も使える短弓使い。

アース

本編の主人公。マイペースなプレイですっかり有名人に。リアルでは38歳独身の会社員、田中大地。

サーナ

ダークエルフのメイドその1。レイピアのように細い剣と盾で戦う。

ゼイ

ライナの兄その1。大剣を操る切り込み役。

ザウ

ライナの兄その2。槍と魔法を操る遊撃役。

登場人物
紹介

プロローグ ―― 女神の悩み ――

「そっちら呼び出してのも珍しいっスね」

“Goddess-in-world” システムの根幹 AI によって、VRMMO「ワンモア・フリーライフ・オンライン」開発陣の中でも特に深く関わっているメンバー三名が呼び出されていた。いずれ「ワンモア」がそもそも目的である“One World”というもう一つの世界に昇華する際には、この AI が世界の女神役となるのだ。

「うむ、何か重大な問題が発生したか？ こちらで確かめた限りでは、大きなエラーなどが発生した様子はないのだが」

“開発部長” がそう AI に話しかける。

プレイヤーは当然知る由もないが、実はもうこのシステムも運営……というか突発イベントなどの動きに、僅かではあるが参加していたりするのだ。そう、これは女神役としての経験を徐々に積んでいるということに他ならない。

「――この世界、そして皆さまの住む世界。両方を私は常に見てきた。そしてそれらの経験を生か

して、この世界がよりよくなるように……少なくとも理不尽がはびこり過ぎないように注意深く観察を続けてきた。でも、そんな中で理解できないことが起きた。その一件はすでに記録してあるの
で、まず見てほしい」

そうして、モニターに映し出されたある出来事。それはハイエルフのガー ज्याによってエルが殺され、次にアースが暴走した《黄龍変身》を用いてガー ज्याを殺し、エルの思いのこもった新しい弓を受け取るまでの一連の流れであった。

「——なに、これ。部長、これは……」

それ以上の言葉が続かない女性開発者。だが、他の二人は無言のまま、その表情を非常に険しいものとしていた。

映像を二、三度繰り返し見た後で、ようやく部長が口を開く。

「まさかな。ここまでそちらの世界の住人を思い、その相手を失ったことによる、怒りなどという言葉が陳腐になるほどの激しい感情。加えてそれらの感情を完全に表現することができる変身能力の所持、さらには進化武器を新しい形態にまで発現させたところか。可能性としては用意していた
してはいたが……まさかそれを本当に実行する人物が現れるとは。この感情だって、我々の持つ技術
を最大限にかき集め、当人が見せかけだけではない本気の怒りを持たない限り、こうはならん」

そしてまた訪れる沈黙。次に口を開いたのは根幹 AI だった。

「私は分からなくなつた。世界は何かあるとすぐに血を流し合う。肌の色の違いで、宗教の違い

で、種族の違いで、金で、食料で。でもそれらは自らが生きるためでもあるので、一方が悪とは言えない。だけど、この出来事の中の男性はそれとは違い、打算的などころなどなくただ純粋に他者のために怒っていた。同じ人間のはずなのに、なぜこうも違う？ 歴史の上で起こつた出来事は
変されて美談になつている可能性もあるが、今回の出来事は私の目で見て耳で聞いたからそれもない。人は、こんな風に自分のためではなく他者のために動けるものなのだろうか？ 泣けるの
だろうか？」

この疑問に即座に応えたのは、男性開発者だった。

「そりゃあ人によるっすね。でも、君はそれをはつきりと見たはずっす。いいつスカ？ こっちには
こういう言葉があるっす。十人十色つて言葉が。十人の人間がいれば、十の色がある。全体的に見てしまえば、保身に動く人間が多いのは確かっす。だからそのせいで争い事も起きるっす。でも、それが全てとは思わないでほしいっす。周囲からなんと
言われようと、今回のような行動をとる奴がいるのもまた人間つてことっす。『義』や『仁』の心つてやつっすね。君はそういつたものをこれからも見て学ばなければならぬっす。よく見れば、その規模に差こそあれど、今回の彼のよう
な行動をとる奴もそれなりにいるっすよ？ 人間、そう簡単じゃないっす」

男性開発者の返答を聞き、沈黙する AI。こうした計算できない人間の動きこそが、AIにとつて学ぶことが最も難しい事柄の一つである。ああするだろう、こうするだろうと先読みしながら様子を窺っていると、実際に九割以上はそうなる。しかし、それは絶対に十割にはならないのだ。そ

してこれはプレイヤーだけではなく、「ワンモア」に住まう住人達ですらそうなりつつあった。

そこへ、今回の出来事である。己の存在が消失する危険を冒してなお、仲間を殺した相手を討たんとして、それを成し遂げた男性。根幹A Iにとって、ここまで自分を犠牲にして事を成そうとする存在を見るのは初めてであった。

「とはいえ、さすがにここまですさまじいのは予想外よ……開発者としては子供達をここまで思っ
てくれるのは嬉しいけど、申し訳なくもなるわね……」

しみじみと、女性開発者がそんなひと言をこぼした。

「——確かに今の時代、こういった『義』や『仁』といったことを感じさせる物事は少ない。成す人間も少ない。しかし、それが完全になくなったというわけでもないのだ。今回の一件は、それをよく教えてくれている」

部長の言葉に「了解しました。今回はお手数をおかけしました」と返答する根幹A Iを背に、開発者の三名は引き上げていった。

この日より、根幹A Iはより一層深く「生きるとは何？ 感情とは何？」ということを考えるようになっていく。自分がそのきっかけとなったことを、アースが知ることはないのだが。

1

「アース、目的の場所はこっち……ついてきて」

ダークエルフの谷にたどり着いた自分は、エルフの長老の娘トイさんの先導で段々畑に左右を挟まれた階段を下り、街中に入る。ちなみにこれまでハムスターサイズだったキーン族のトラちゃんも、森を抜けたことで元通り大きくなっている。

街中にダークエルフがいるのは当然として、妖精族や龍族も多数見受けられる。街の外見をひと
言で言うと、イタリア・ヴェネツィアのような建物が並んでいる。エルフの村とは、全般的に人工物がメインであるところと、建物に芸術性を出しているところがはっきりと違うな。

見た限り、ダークエルフのみなさんは男女共に軽装の人ばかり。女性だと胸と腰にだけ簡単なものを着けて、へそやら肩やらを丸出しにしている人もかなり多い。

プロポーションに自信があるからこそできるんだろうか？ 女性のプレイヤーと思わしき人が羨望と憎しみが混じったような視線を向けている。

銀髪褐色肌に加え、出るところはしっかりと出て、控えめであってほしい部分は控えめになっているダークエルフの女性を見りゃ、嫉妬もするだろうな。スリーサイズという名の呪縛からはな

なか抜け出せるものではないし。

ダークエルフのお姉さん方もその辺は理解しているのか、だらしない表情でガン見している男性プレイヤーに向かって投げキッスをサービスしているところも何度か見受けられた。

そんな光景を横目で見ながら、トイさんに続いて街を歩いていくのだが……行き先はやはり長老の家方面か。

しばらくすると、噴水のあるかなり大きな広場に出た。そこでは一人の女性ダークエルフが、手に持った吟遊詩人が使うようなハープで、静かな曲を奏かなでていた。曲のタイトルなどは知らないが、それはまるで鎮魂歌ちんこんかのような雰囲気おんぎを漂なまわせている。

「貴方あなたも以前一度会ったと思う。あの子は私の義理の妹で、今回の連絡役でもある……」

そういえば妖精国で、謎の女性に出会ったことがあったな。あの子か……今見せているもの悲かなしげな表情にだまされてはいけない。あの子はそんなおとなしい性格はしていない。

曲を終えて周りを見渡したダークエルフの女性が、こちらに気がついた……というよりは、トイさんに気がついたのだろう。ゆっくりとこちらにやってきて、トイさんの手を取る。

「姉さんお久しぶり、色々とは話は聞いているわ。その影響で、こつちでもいくつか変な噂うわさが生まれている状況よ。噂の真偽を知るためにも、姉さんの到着を待っていたわ。やっぱり肝心なことは、水晶の記憶と直筆の手紙ではつきりさせたいから」

ハイエルフ関連の話は、すでにこつちにもある程度は伝わっているか。ハイエルフと何かしらの

衝突を起こした人が、自分以外にもいる可能性は十分にある。

「とにかく、ハイエルフ達との衝突の状況を、ダークエルフの長老様に直接報告したい……長老様は大丈夫なの？」

トイさんの確認から二人の会話が始まったが、そこからは声のポリウムが落ちて、ほとんど聞こえなくなった。まあ聞き耳を立てるつもりもないので、結論が出るのをのんびりと待つ。

それから数分後、どうやら内緒話は終わったらしい。まずトイさんがこちらにやってきた。

「今回はありがとう……これが達成報酬」

ここまで一緒に来るのには依頼の体ていを取っていたので、五〇〇〇グローをもらった。これで仕事自体は無事完了だが……トイさんの今後の予定を聞いておくか。

「確かに受け取った。で、これからトイさんはどうするんだ？ とりあえずダークエルフの長老様に何かしらの報告に行くというの分かるが、その後は？ すぐにエルフの村へ帰るのかい？」

自分の質問に答えたのは、トイさんではなくダークエルフの女性の方だった。

「貴方次第だけど、私達二人としばらくPTパーティを組まない？ 行き先はこの谷の下になるわ。一人で冒険するよりはいいでしょ？」

そんなことを言いながら、自分の耳に顔を寄せてくる。

そして、こう囁ささいてきた。

（森で色々問題があった直後だからこそ、独ひとりになっちゃダメ。私は前に言ったわよね？ お

ねーさんは強いのです、って。時には他の人に寄りかかってもいいのよ？」

そして囁き終えた後、自分の頬にチュッ♪ とキスを残していく。

え？ と自分が彼女に顔を向ける前に、トイさんがずかずかと近寄ってきて、ダークエルフの女性のほつぺたをむにむにと引つ張り出す。

「貴女は……いきなり何をやってるのよ……！」

ボソボソと喋りながらも、怒気の混じった声を出すトイさん。その光景をとらちゃんと一緒にあつげにとられつつ眺める。

そんな姉妹喧嘩(?)が数分続き、ようやくトイさんが手を離れた。ダークエルフのほつぺたは、トイさんが掴んでいた場所だけ見事に赤くなっていた。

「姉さん、結構本気で痛かったわよ……？」

頬をさすりながらダークエルフの女性は抗議の視線を向けるが、トイさんはどこ吹く風といった感じでっーんとした表情を崩さない。

「ま、まあこれといった予定は自分にもなかったし、PTを組もうというのなら断る理由もないが……ところで実には間抜けな話で申し訳ないんだが、まだお名前を聞いていないよな？」

この妙な空気を変えるついでに、いまだに教えてくれないダークエルフの女性のお名前を聞いておきたかった。行き先は森ではないからハイエルフ達とかち合うこともないだろうし、名前を知らないのは不便だし。

「あ、そういえばまだ言ってなかったんだった。本名は長くなるし、何らかの儀式のときにしか使わないから、普段使っている愛称でいいのよね？ 私はライナと呼ばれてるわ。よろしくね」

ライナさんね、メモメモっと。

「了解、ライナさん。ところで一旦ここで分かれる前に聞いておきたいんだが、自分ととらちゃんが泊まれる宿屋を紹介してもらえないかな？」

ライナさんにそう質問すると、ダークエルフの街にもとらちゃんのような案内役が休める場所はあるそうで、そこそこのお値段でそこその質を保っている宿屋をいくつか紹介してもらえた。

この後トイさんとライナさんはダークエルフの長老の元で話し合いだろうし、自分はログアウトして、現実世界で就寝するのもいいだろう。

「じゃあ、自分はこれで失礼します」

トイさんとライナさんにそう告げ、立ち去ろうと後ろを向いたとき、背中から抱きつかれた。背中に当たる感触からして、これはライナさんだろう。なぜ分かったかの追及は避けていただきたい、トイさんに殺されかねないので。

(ふふっ、これからしばらく楽しませてもらうからね?)

左耳をペロッとなめられた後に解放される自分。これは、PTに入るといふ決断は早まったかな……？

【楽園は】ダークエルフの谷攻略スレッド No.1【ここにあった】

1：名無しの冒険者 ID：dlec8ecAzh

立てた。反論は受け付けない

2：名無しの冒険者 ID：veP5d2cedl

しないよ、ダークエルフのお姉さんはすばらしい

3：名無しの冒険者 ID：f5eDe1s2Vp

初めて来たときは、パラダイスに見えた

4：名無しの冒険者 ID：dkemrVd1Ea

まったくだ、実にいい目の保養……

5：名無しの冒険者 ID：kdR5Lerded

男の人はそうかもしれないけど
女としては色々と心を碎かれます……
あのプロポーションはひどいです

6：名無しの冒険者 ID：v5d8gEdfes

仮想現実だって分かってはいるけど……
うん、泣いていいよね
というか泣く

7：名無しの冒険者 ID：ceGfpek5He

運営は、女性に恨みでもあるの!?

8：名無しの冒険者 ID：ekdi3Cd1wL

それはさすがにないと思うけどさ……

とらちゃんを専用の休息地に預けた後、長期滞在できる宿屋を探す。
ライナさんにお勧めされたところを回って、六件目でようやく一部屋空きがある宿屋を見つけた
ので、そこに泊まることにする。一人用と考えれば十分なスペースがある部屋だから、室内で薬草
の調合などを行うこともできるだろう。とりあえず、それは明日以降でいいな……
ベッドにもぐりこみ、この日はログアウトした。

19：名無しの冒険者 ID：gEd24Ec1eh

男って本当に馬鹿ばかり

20：名無しの冒険者 ID：2dejmcEc8h

英雄になるのは男、ただしその英雄を作るのは女、ってな？
だから男は馬鹿でいいんだぜ？

21：名無しの冒険者 ID：vkec2eaWxu

それっぽく言っても
結局胸に目が行っているだけでしょーが！
ヘンタイ！

22：名無しの冒険者 ID：d22Edcse6r

むしろ目が行かないわけがない
ダークエルフの谷の攻略には
賢者の心が必要とでもいうのか……！

23：名無しの冒険者 ID：G2eYdw4s1a

そこ、血涙拭けよw
気持ちは分からんでもないけどよ～

24：名無しの冒険者 ID：Gd2e5vi0xj

ダークエルフの谷、リアルでの実装はまだですか！！

25：名無しの冒険者 ID：kdhrRT1edu

永久にお待ちくださいw

26：名無しの冒険者 ID：Ed23edjaFe

攻略スレッドが立ったから来てみたのに
まったくもって攻略の話が出ていないことに文句を言いたいw

9：名無しの冒険者 ID：Vd5e3dSaxz

全体的に軽装だから、ボディラインがもろに見えるんだよな
裸よりある意味エロい

10：名無しの冒険者 ID：fkejce1c9p

ある意味心が鍛えられますね

11：名無しの冒険者 ID：foeDwx4w1t

変に捻じ曲がって鍛えられそうだがなw

12：名無しの冒険者 ID：oekdje5xKg

男の人の筋肉美もすごいわよねー……旦那のたるんだお腹とは大違い

13：名無しの冒険者 ID：kjdGe5d3Sa

がふうっ！！

14：名無しの冒険者 ID：8dCrr1e2Gt

ぐふうううう！！

15：名無しの冒険者 ID：f532ecDw2y

心あたりのある人達が次々と吐血してるw

16：名無しの冒険者 ID：Dc6e2Rf4au

まあ、成人病の肥満は色々はやべえよな……

17：名無しの冒険者 ID：h2r6fEd4eq

こんな形で、自分の不摂生を思い知ることになるうとは……

18：名無しの冒険者 ID：25441deDcj

しかし、このスレッド立てたの誰だよw 確かに楽園かもしれんがw

614：名無しの冒険者 ID：F2e5dwxAwF

前衛が毒を受けたら、後衛は絶対にすぐ解毒しろよ？
特に混乱毒はやばい
まともに動けないから、同士討ちこそないがな

615：名無しの冒険者 ID：dc2eaxc4bx

足場が狭いからな……
谷の下まで行ければまだ何とかなるんだが
到り着く前に混乱毒食らって落下死って報告例が多いぞ

616：名無しの冒険者 ID：vD2e3cEdaA

とはいえ、前衛もきちんと毒消しは持ってこいよ？
自分で使わなくても、ストックを切らした後衛に渡すためにな

617：名無しの冒険者 ID：Bd5eCsex7h

モンスターは両棲・爬虫類系かね？
カエルにヘビ、トカゲなんかが出てくる
カエルとヘビが共闘すんじゃねえ！

618：名無しの冒険者 ID：Vc1ed8Gf1v

本来なら食われる方だね、カエルはw
だけど敵となるとめんどくせえ相手

619：名無しの冒険者 ID：djdUtd1der

舌を伸ばしてくるから、手や足を取られるとキツイ
種類によってはその舌自体が毒を盛ってくるから、本当に面倒

620：名無しの冒険者 ID：vSDckjecES

重鎧着てても、毒食らうときはあっさり食らう
装甲の厚さなんて、毒の前では無意味だった

27：名無しの冒険者 ID：ksjeC2e8dW

そりゃ、お前……街中のダークエルフのお姉さま達から発せられる誘惑に
勝てる男は少なからうw 慣れるまではな

28：名無しの冒険者 ID：Gd3wXw1w7G

VRでよかったと思う反面、VRだからこそ悔しい面が強い場所だよなw
リアルでこんな場所があったら絶対移住する

29：名無しの冒険者 ID：Fd2e5Ggex7

あのスタイルで軽装だもんな……
どうしても目が行ってしまうよ

30：名無しの冒険者 ID：Gd2r5gYUea

同志しかいねえなw 無理もないけどw

611：名無しの冒険者 ID：jdEd1exWqb

いい加減攻略の話なw
ダークエルフのお姉さんファンクラブは別の場所でw
谷に出てくるモンスターは、大半が毒持ちだった

612：名無しの冒険者 ID：Gd2e8Vkjwr

毒消しは必須、ランクもアンコモンの製作評価7が最低ライン
レアランクならば間違いなし

613：名無しの冒険者 ID：Bd5e2Gr7cV

ダメージを受ける基本の毒に加えて、一定時間後に麻痺させる遅延毒や、
混乱してまともに動けなくなる混乱毒もあるからな？

628：名無しの冒険者 ID：Cd572d53gn

やらなきゃ死なせてたという状況下でもきちんと見えよ？
そういうところおろそかにするのろくなことにならねえ

629：名無しの冒険者 ID：ckhJr1d1er

食らった側としては、さすがにびっくりした
味方からファイアーボールとか飛んできて丸焼きだからね……
VRならではの恐怖

630：名無しの冒険者 ID：Vd26cFe7eX

その点冷気魔法はまだおとなしいからな……
ブリザード・ワールドだけ？
水魔法の高位魔法があるだけで難易度が変わる

631：名無しの冒険者 ID：Gd2e6cSq5i

ブリザード・ワールドはまだ使い手少ないだろ？
あれ、現時点の最高位魔法じゃなかったか？ 特化者しか撃てないはず

632：名無しの冒険者 ID：Bd5e2cAwb9

ブリザは欲張りすぎだけど、アイスレイン付近が使えるとかなり楽だね
ダメージ的にも妨害的にも

633：名無しの冒険者 ID：Gd2e9cDecn

まさに水魔法使いの聖地になってるよね、現状は

634：名無しの冒険者 ID：Fd2e8cDkr5

他の属性魔法はどう？

635：名無しの冒険者 ID：Bdkerijc9o

風と土と闇魔法使いは泣け。以上

621：名無しの冒険者 ID：Gd52eCdeex

いやいやいや、装甲大事よ？
薄いと締め上げられるだけでダメージが痛い何の

622：名無しの冒険者 ID：Vd5eCd1erb

カエルタイプの舌もそうだが、ヘビ系統の締め付けがまたキツイ
抱きついてくるのはダークエルフのお姉さんだけでいいです

623：名無しの冒険者 ID：Gd2e5Swxex

そういうわけにもいかんからな……
毒や巻き付きによる行動阻害が多いから、後衛も前衛に頼りきるなよ？

624：名無しの冒険者 ID：Bf2e6dwD4z

だね、前衛の動きを封じられる前に何らかの方法で足を止める
確実なのは冷気
水系統魔法使いの人气が跳ね上がってるよ

625：名無しの冒険者 ID：Ce1d4aw83m

足止めならってことで風系統の中にある電気系統も試してみたが
こっちはいまいち
どうも絶縁体もどきになってるっぽい

626：名無しの冒険者 ID：ge1edc5EQm

火はダメージソースとしては非常に有効なんだけど
だからって味方ごと焼くのはな……

627：名無しの冒険者 ID：Gd2e8vSczu

もちろんダメージはないんだけど……燃やされる方は不快だよな
ちゃんと了承取れよ、できる限り

643：名無しの冒険者 ID：VvkeD13dAp

エルフの森じゃ出番がなかったが、この谷では再び盗賊系必須！
数少ない、ヘビの接近を確実に感知できる手段持ちだから

644：名無しの冒険者 ID：BdmkeXwe1x

まあ、森で出番がなかったからって、
盗賊スキル持ちをギルドから追放したとことかはないだろう……

645：名無しの冒険者 ID：dd5vHr1e8v

してたらアホだろ……
さすがにないわー

646：名無しの冒険者 ID：xckEIFjw2t

お陰で野良PTで、盗賊持ちと水魔法持ちが見つからねえよ……
さすがに野良メインの限界が見えてきちゃったかな……

636：名無しの冒険者 ID：vd1e5cDetp

ざっくりとしすぎw
土はいまいちで、妨害もできない
落とし穴出してもすぐあがってきちゃうし
闇で目を潰しても意味なし

637：名無しの冒険者 ID：Vcd27eCy9y

ヘビとかって、サーモみたいに相手の温度を感知できるとか聞いたから
目潰しは意味ないっぽいんだよね

638：名無しの冒険者 ID：fkeCe1de1e

光はダメージソースや妨害としての能力はないけど
回復や補助で頑張ればいだけだから安泰

639：名無しの冒険者 ID：C2e8cEbgre

ただ、毒消し能力は水魔法の方が優秀だけだね……
光は精神的な異常を消せるから、混乱への対処は優秀

640：名無しの冒険者 ID：Bdkemci8hq

水魔法は安定した強さがあつたけど、ここで一気に出てきたな……
ギルメンも水魔法のレベル上げにせいを出してる

641：名無しの冒険者 ID：fkxIwXsw8R

実際、効果的だからなあ……動きを止める上にダメージも大きい
そりゃ使わない方が変

642：名無しの冒険者 ID：vEg2e5Xsd8

ヘビが厄介だからねえ
するするっと近寄ってきて、巻きついてがぶりと毒を入れてくる……
しかも下手すると壁からも来るし

翌日ログインしてみたところ、トイさんとライナさんはまだ自由に動けないようであり、冒険には行けないとお返事が。まあそれならそれで構わないかと、宿屋の個室にて、ポーション製作をやるうかと調合セットを取り出す。

チラッと掲示板を見た限り、解毒できるポーションを用意するか魔法を覚えるかしていないと、谷を進むのはかなり厳しいようだ。魔法を使えない自分の場合は、解毒ポーションを多く作っておく必要があるだろう……掲示板のレスの大半が、ダークエルフの見事な姿についての談義だったところには何も言うまい……

「えーっと、解毒剤は薬草と解毒剤を……この分量で……」

薬草を多く突っ込めばいいものが出て来るといってもいいもので、分量はきつちりと量る。リアルでも、薬剤師がどんぶり勘定で調合していたらヤバイでしょ？ 例えるならそんな感じ。

「うーん、やっぱり色々となまってるなー……これまでイベントが次々とあつたせいで、調合はほつたらかしたからなあ」

しばらくポーションを作ってみるが、出来上がってくるのはアンコモンレベルの【アンチポイズ

ンポーション】。しかも製作評価は5や6。掲示板の情報を信じるのなら、今回はまったく役に立たないレベルだ。

とりあえず数だけは溜まってしまったので、街に繰り出してそれらを売り払う。

「はいどうも。それにしても最近【アンチポイズンポーション】を売りに来る人が多いけど、なぜかしら……」

ダークエルフの店員さんはそんな風に首をかしげていた。なるほど、自分と同じ考えの人は当然いるよね。

ひとまずそのお店で薬草系統を買い込み、再び宿屋の個室へと戻る。あの様子だと、今後は在庫過剰で買い取りを拒否されるかもしれない。丁寧に調合をしないと。

ごりごりごりと薬草を潰し、薬水を注ぎ……そんな作業を続けることしばし。ようやくレア等級【アンチポイズンポーション】が出来始めた。といっても、製作評価は1か2止まりではあるんだけどね。製作評価が低いと、ポーション中毒の発症が早まってしまうという不安が残るんだが、解毒そのものができるよりはマシと考える。

（幸いメンバー全員が弓を使えるから、モンスターに対して遠距離蜂の巣作戦でいければ、ポーションを乱用せずに済むとは思うが……そう上手くいかないのがこの世界だよな）

特にヘビ系統は壁に張り付き、横や上から降ってくることもあつたらしいからな。盗賊系統スキルの《危険察知》に三次元的なサポートはない。つまり、モンスターがいても左右どちらかは分か

るが、上か下かは分からないってことで……谷という地形である以上、過信はできない。それでもないよりははるかにいいんだけど。

とりあえず、ここで休憩を挟むことにした。宿屋から出て、ダークエルフの街をのんびりと散歩する。その途中、PTチャットでライナさんから途中経過報告が届けられた。

【うわさが予想以上に捻じ曲がって広まっていて……ごめん、まだまだかかりそう】

全てはこのひと言に集約していた。明らかに現実の斜め上を突っ走っていったうわさを鎮静させるのが結構大変らしく、ダークエルフ長老指示の元でまだまだ走り回る必要があるとのこと。トイさんもそれに協力しているらしい。彼女がエルフ族の長老の娘であるからだろう。

【了解、焦る必要はないから、そっちをしっかりと済ませてくれ。うわさってものは無責任の固まりだから、放置しておくで色々恐ろしいことになるからなあ……】

うわさ話が大好きだって人は結構いる。それ自体は何の問題もない、ないのだが……余計な尾ひれをつけたがる人が多いのだ。あたかも自分が自分の目で見て、耳で聞いてきたかのように装飾してしまう人もいる。それはごく一部の例外と考えても、伝言ゲームが正確な情報を伝えてくれることはまずない。

勝手なうわさ話を作り上げられた結果、本人には何の罪もないのにもかかわらず、ひどい目に遭わされたという人は多いのではないだろうか？

(まったく、うわさってのはたちが悪い。それはこの世界でも同様か)

ライナさんからのPTチャットを切って、はあつとため息をつく。そういえば自分が事故に遭ったときも、勉強に苦しんだ結果、衝動的に自殺しようとして飛び出した、つてうわさが一部で立つたことがあったな。いったい誰が言い出したんだかな……当時はそれどころじゃなかったから相手にもしなかったが、よくもまあそんな話を無責任に作り上げられるものだ。

そんな少々苦い思い出が頭に浮かびつつ、ダークエルフの街をのんびり散歩する。

今日も相変わらず、ダークエルフに見とれる人が多いな。銀髪褐色肌って組み合わせはファンが多いらしいし、その上最高のボディラインまで持っているのだから、見とれるなという方が難しいのか？

「あのスタイルを生かして、ウエイトレスやメイドをやってみると、一気に男の心を掴みそうだ……特にダークエルフが店員のメイド喫茶とかあったら、ご主人様やお嬢様の財布の中身が冥土めいどに行くことになりそうだ」

そんなことをついつぶやいてしまったのだが、傍を歩いていたダークエルフの男性の耳が自分の声を拾ったらしい。

「私達ダークエルフの中にも、メイドは普通にいますぞ？　メイド喫茶というものはよく分かんが」

え、と声を上げたのは自分だけではなかった。周りにいたプレイヤー達が一斉にハモっていた。「なんだ、お前達皆、興味があるのか？　だったらついてこい。お茶と、ちょっとした茶菓子も出

すぞ?」

そんなことを言うダークエルフの男性。もしかして、ダークエルフの富豪なのか?

とりあえず面白そうだとぞろぞろとついていくプレイヤーの集団は、三〇人ほどだろうか? 自分もその中にいる。

「おい、帰ったぞ! 客が大勢来たから広間に通せ!」

はい、予想通りのでっかい館のご主人様でした。左右にずらっとメイドさんが並ぶアレで、「〇〇」お帰りなさいませ、ご主人様」「〇〇」のお言葉もありました。ちなみにメイドさん達はミニスカではなく、昔実在していたような地味な紺の服装でした、実にいいです。

他のプレイヤー達も「メイドさんだあ」とか、「楽園のさらに先があるとは……!」とか言ってるな。

「妙な方達だが、それでも我が家の客人だ。今日はくつろいでいってくれ給え」

香りのよい紅茶に加えて、どう見ても「ちよっとした」では済まないレベルのお茶菓子も出されてしまい、折角なので堪能たんのうさせてもらった……自分だけは。他の人達の視線はどっからどう見てもメイドさんに釘付けです。

「それにしても面白いな、お前達は。そこまでメイドが珍しいのか、それとも愛おしいのか?」

館の主人の質問に、一人のプレイヤーが拳を固く握り締めて立ち上がる。

「メイドとは、ロマンです!」

そしてひと言、そう言い放ったのである。館の主人は一瞬あつげにとられたが、その後に「はっはっはっはっは!」と大声で笑った。

「そうか、ロマンか! だからこそお前達はそこまでメイドに執着するのか! ロマンといふのであれば仕方がないな!」

いや、あの、そこに自分を混ぜないでほしかったな……メイドさんは、好きか嫌いかで聞かれれば好きな方ですけど、ロマンだと言いつけるほどのレベルではないのですよ、自分にとって……

だが館の主人は、そのプレイヤーの返答をいたく気に入らしく、一人につき一人のメイドをつけて甲斐甲斐かいかいしく世話をさせた。

感想の方を正直に申し上げさせてもらうなら、とてもいい夢を見させてもらいました、という言葉に尽きると思う。他のプレイヤーも、メイドさんにケーキを食べさせてもらったりしてました。

お陰でログアウトするまでつつい居座ってしまった。



【スキル一覧】

〈風迅狩弓〉Lv 16 〈剛蹴〉(エルフ流・若輩者) Lv 30 〈百里眼〉Lv 22 〈技量の指〉Lv 18

〈小盾〉Lv 26 〈隠蔽・改〉Lv 1 〈武術身体能力強化〉Lv 51 〈スネークソード〉Lv 46

〈義賊頭〉Lv 17 〈妖精招来〉Lv 7 〈強制習得・昇格・控えスキルへの移動不可能〉

追加能力スキル

〈黄龍変身〉Lv 2

控えスキル

〈木工の経験者〉Lv 1 〈上級薬剤〉Lv 23 (↑5UP) 〈釣り〉(LOST!)

〈料理の経験者〉Lv 7 〈鍛冶の経験者〉Lv 18 〈人魚泳法〉Lv 9

EXP 34

称号・妖精女王の意見者 一人で強者を討伐した者 ドラゴンと龍に関わった者

妖精に祝福を受けた者 ドラゴンを調理した者 雲獣セラピスト 人災の相

託された者 龍の盟友 ドラゴンスレイヤー(胃袋限定) 義賊

人魚を釣った人 妖精国の隠れアイドル 悲しみの激情を知る者

プレイヤーからの二つ名・妖精王候補(妬) 戦場の料理人

3

翌日、ログインして「ワンモア」世界の時間が朝であることを確認した後、トイさんとライナさんにPTチャットを出してみた。うわさの鎮静化は進んだのだろうか？

【おはよ、そっちの状態はどうなった？】

PTチャットからは、やや疲れたようなライナさんの声が聞こえてきた。

【あーうん、やっと少し落ち着いたらって感じよ……トイ姉さんが持ってきた証拠品とエルフ長老からの手紙のお陰で、ハイエルフ達がある程度静かになったってことと、攻め込んでくる気配はないうってことがようやくよく伝わり出したからね。後は主だったところにこの話を流せば、大体おしま【い】

どうやら、何とかかなりそうか。証拠品(恐らくは、誰かが持っていた記録の水晶の映像)の内容がハイエルフ達が攻めてくるようなことはないと証明してくれるので、落ち着きも早まるだろう。あのとときの犠牲は無駄になっていないと信じたい。

【そうか、それはよかった。そうすると、谷への冒険はもうしばらく時間を置いた方がいいかな？】
自分的には単独で行くのもいいんだが、それをやると、トイさんとライナさんからPTを組んで

いるのに何で置いていったのと文句が飛んできそうだからな。

【そうね、さすがに冒険というか、戦いに行くのはもうちょっと休ませてほしいかな。かといってアース君を待ちぼうけさせるのはおねーさんとして不本意だから、遊びに行きましようか】

ライナさんの「遊びに行きましよう」のひと言を聞いたときに、自分は背中にくくつとする感触を覚えた。何だ、今は……この感触は、危険な罠を感じ取ったときのものに近いぞ。こういうときの直感は馬鹿にできない。

【い、いや、それには及ばない。休むときはしっかりと休む方がいいぞ】

だから断ることにした。ところが、ライナさんはこれを自分が遠慮したと受け取ってしまったようである。

【大丈夫よ、仕事自体はもう他の人に任せているから。遊びに行くという言い方がまずかったかしら？ トイ姉さんも含めた三人で、街を軽く案内してあげましようってことよ。トイ姉さんもこっちに来るのは久々だから、街がかなり変わったことに戸惑っている様子だしね】

む、なるほど。案内というのであればありがたいな。昨日の散歩中にいくつかお店も見つけたが、もちろんそれが街の全てではない。一回案内してもらって、掘り出し物とかがありそうな店を教えてもらおうのもいいかもしれない。

【そういうことならお願いしようかな】

自分の返答に、そうそう、素直が一番よ、なんてことをライナさんが言ってくる。エルフやダー

クエルフといった長命種族からしてみれば、自分なんて近所の小さな子供みたいな感じなんだろうかねえ？ 現実にエルフやダークエルフがいればその辺を質問してみたのだが、それは叶わぬ話だな。彼女達はあくまでファンタジー世界の住人なのだから。

待ち合わせ場所は、初日にも待ち合わせ場所として指定された広場だ。一発で分かる格好をしているとの話だったが、はて？

とりあえず広場に向かい、足を踏み入れると、何やら人だかりが出来ている場所が。

「こっち向いてくださいい！」「実にいい、すばらしい！」「S S フォルダが埋まっ……でももっと収めたい！」

なんだあれは？ うわさに聞く年末の聖戦みたいな雰囲気を出しているな。まあ自分には関係ないだろう……それより、トイさんとライナさんはどこだ？ それっぽい人はいないけど、どこにいるんだろうか。仕方がないのでPTチャットで聞いてみることにするか。

【広場まで来たんだけど、二人はどこにいるんだ？ 探し回っているんだが一向に見当たらないぞ？】

そう呼びかけた途端、大勢の人が集まっていた場所から二つの人影が飛び上がった。その人影は自分の目の前にふわりと降り立つ。

「……ごめん、囲まれた」

「姉に同じく」

そのトイさんとライナさんの姿を見た自分は、反射的にアイテムボックスからハリセンを取り出して、二人の頭を遠慮なくぶっ叩いていた。

「当たり前だ！ 何で服装が『メイド服』なんだよ！ 普通の服はなかったのかっ！」

そう、なぜかトイさんとライナさんの服装は、紺色ロングスカートにエプロンの見事なメイド服だったのだ。誰だって、秋葉原とかでもないのにメイド服を着て歩いている人を見かけたら「なんだありゃ!？」とつい見えてしまうだろう？ あの人だからはこの二人が原因だったとは。

「え？ 好きなんでしょ？ メイド服を着た女性が」

ハリセンで派手に叩かれたのにケロツとしているライナさんが（確かに、ハリセンのダメージはゼロであるが）、自分に向かつてさらっとそんなことを言う。

「それを完全否定はしないが、だからって外で着る服ではないだろう……そもそも、そんな情報をどこで仕入れてきたんだよ」

自分の質問に、ライナさんはこれまたさらっと答える。

「どこからって、貴方も知っているダークエルフ特産の特殊布生産長者のご当主様からだけど？」

そう言われた自分は首をひねる。そんな知り合いはいないはずなんだが。

「この前、メイド喫茶？ とか、ご当主様の前でつぶやいたらしいじゃない？」

ライナさんがここまで付け加えて分かった。あの大きな館のご主人様か！

「それにしても、ダークエルフ特産の特殊布？」

一番引つ掛かっていたのはそこだ。特殊布ってことは、何かしらの付加価値があるのだろうか。

「そうね、私達ダークエルフは基本的に鎧を着たがらないわ。鎧を着ちゃったら、長所である敏捷性が失われてしまうからね。そこであそこのご当主の初代が、特別な布を生み出したのよ。その布は、下手な鎧よりも防御力がある上に敏捷性も下げないというすばらしい物だね。もちろん製法は門外不出だし、エルフ、ダークエルフ、ハイエルフにしか販売されないけど」

そんなものがあるのか。それを生み出し、販売することで大きな利益を得たからこそ、あんな大きな館にメイドさんを多数雇って生活ができるの。

「今私が着ているこのメイド服もそれで作られていて、その気になればこのまま戦闘にも移れる優れものよ？ あそここの館にいるメイドさん達も全員戦闘能力持ちでね、ご当主のボディガードを兼ねているから、動きやすい工夫がきちんとされているのよね」

ぬ、そうなのか。するとあのときは皆ただデレデレしていたが、もし悪意を持つ人が紛れ込んでいた場合は、すぐ取り押さえることもできたというわけか。と考えると、あるとき一人一人にメイドさんをつけたのは、そうなった場合に対処するメイドさんを指定したという一面があったわけだ。まあそんな馬鹿な真似をする人はいなかったから、始めから終わりまで和氣藹々^{わきあひめ}の光景で終わったんだが。

「なるほどな。だけど、やっぱり外で着る服じゃないぞ。普段の服でよかつたらうに……こんなに

目立ってしまった以上、案内も何もないだろう？」

トイさんとライナさんを取り囲んでいた人達は、殺意がこもった視線を自分に向けてきている。そりゃまあ、羨ましいという感情は理解できるけれども、針のむしろというこちら側の心情も理解してほしい……訴えても無駄だろうけど。

「なんで？ 問題なんて別にないでしょ？ さ、行くわよ」

そう言うが早いから、ライナさんは自分の腕を掴み、半分引きずるような勢いで引張る。

「私を忘れないで……」

慌ててトイさんがついてくる。あつげに取られている取り巻き達を置いてきぼりにして、広場を後にする自分達。

この後丁寧な街を案内してもらえたのはありがたかったのだが、メイド服を着たエルフとダークエルフに挟まれた自分は、異様なほど悪目立ちしていた……

4

さて、翌日。「ワンモア」にログインした自分は、事前のアポも取らず、ある場所に突然押しかけた——いや、この言い方は正しくないか。正確には、迷わず殴りこんだ、といった方が間違いない

いかかもしれない。

「それで突然の訪問とは、何の御用かな」

行き先は、あのメイドさんが大勢いる大きな館。アポなしで本当に会えるとは思っていなかったのですが、最初は出てきた人に伝言を頼むつもりだった。だが今こうして会えた以上、直接ここで言うてしまおう。

「では早速要件を言わせていただきますが、ライナさんになぜ、自分がメイドに惹かれることを教えてしまったのですか？ と伺いたかったのが一つ。それから、もうこれ以上変に広めないでください、という二つです」

昨日はメイド服を来たトイさん&ライナさんに挟まれて、街を案内された。いやまあ、お陰で街にある施設の場所などはよく分かったのだが……その代償はかなり大きかった。なにせメイドさん二人に案内されている一人の男、という光景のせいで、多くのダークエルフの皆さんから自分はメイド好きであるという認識を持たれてしまった。

外套のフードを被ってるんだからもしかしたら顔は見えないんじゃない？ とも思ったのだが、どうもダークエルフの皆さんは、その人が放っている気みないなものを感ぜられるらしい。だから、個人特定は顔が見えなくても大体可能らしく……ライナさんがニコニコ顔でそのことを教えてくれたときには、頭を抱えてしまった。

それもこれも、今日の前にいるご当主が原因なのだから、少々強く当たらせてもらっても罰はあ

たるまい。

「ふむ？ メイドはロマンなのだろう？ ならばそのロマンを実現することに意味があると思ったのではな」

いや、待つてほしい。それは自分が言った言葉ではないのですが。

しかしご当主は、あのときあそこに集まっていた人達全員の総意と捉えたらしい。そして何らかの理由で自分とライナさんが知り合いであると知って、彼女らにメイド服と一緒に情報を流したのか。

言うまでもないが、ダークエルフの長老の娘であるライナさんなら、街の有力者のご当主とはそれなりのパイプがあると考えるのが普通だろう。

「実現するにしても、もう少しおとなしい方法でお願いしたかったというのが、こちらの本音なのですが……」

何もあんな風に、トイさんとライナさんに服を与えなくてもよかったはず。お陰で酷いことになつてしまった。

「ふむ、そうか。それは済まなかつたな……ロマンだからこそ、メイドを横に置いて一緒にいるというのをやりたいのかと思つてしまった」

いやいや、自分はそのままで吹っ切られられないのですよ。自分の中のひっそりとした趣味を、ここまで大々的に他者に知られてしまう日が来るとは思いませんでしたよ……仮想現実とはいえVRだと、精神的に受けるダメージの量が現実とあまり変わりがない……

「が、あれだけ派手にやつてしまつた以上、もう引つ込みもつまい。ならばいつそ、より派手にやつてみるのも面白いと思わないか？」

突然、にやにやしているご当主がそんな恐ろしい提案をしてくる。

「すみません、もうそういうのはお腹いっぱいです。切実にお腹いっぱいですから、やらなくていいんですよ！ やらなくていいんですよ！ 大事なことから二回念押ししましたよ！」

こちらは必死なのだが、ご当主だけでなく控えていたメイドさん達まで、我慢できなくなつたのか笑い出している。他人の必死な姿が笑えるということは理解できるので、それに対していちいち腹を立てたりはしない。苦笑はするけど。

「し、失礼しました。ですが、昨日のあのあたふたするお姿を見ていた身としましては……」

メイドさんの一人が必死で笑いを堪えつつ、そんなことを教えてくれる。やれやれ、あれだけ目立てば当然、ここにいる中の誰かが見ているか。自分にできることは、顔を押しさえてうつむくことだけだった。穴があつたら入りたいとはこんな心境である。

「まあ、もう済んだことですからそれはいいです。いちいち掘り返したりもしませんから、そのまま記憶の奥に蓋をしてください……とにかく、これ以上何もしないでくださいればそれでいいですから」

釘を刺しておかないと、色々危険だからな。

だがここで、笑いやんだご当主がこんなことを言ってきた。

「そうか、だが君は冒険者だろう？　そしてライナ嬢から聞いているが、現時点ではメンバーが三人しかいないそうだな？　新たにメンバーを集めるのは大変だろうし、私の方から出そうと思っ
て用意しておいたメンバーが三人いる。見るだけでも見てほしいんだが、どうだろうか？」

む？　確かに情報を軽くあさっただけでも、ダークエルフの谷底にいるモンスターは厄介な面が多い。だからPTの面子かみづらをもう少し増やそうかなと考えていたのは事実だ。

そんなことを考え始めた自分から断りの言葉が出なかつたために、提案を了承したと判断したご当主は、その三人を連れて来るようにと指示を出した。そうして現われたのは、やや幼さを残す、身長一六五センチ前後のダークエルフのメイドさん達だった。

「この三名にはこちらで行える訓練は十分に積ませたが、まだまだ未熟者だ。そこで、冒険者と一緒に谷底で魔物相手に戦うことで、訓練では得られない経験を積ませたい。どうだろうか？　ちなみにこの三人は、冒険者に例えるなら前衛が一人、回復と支援を得意とする者が一人、遠距離攻撃特化者が一人だ」

ふーむ、ここで受け入れてしまえばメンバーは一気に揃うし、このご当主とツテが出来るか？　だがなあ。

「えーと、やっぱり戦うときはメイド服なんです……か？」

並んでいる三人のメイドさんに確認をとるが……返ってきた言葉は予想通りであった。

「もちろんです。この服は私達の仕事着であり、戦闘服でございます」

やっぱりそう答えるか。トイさんやライナさんのようなコスプレではなく、彼女達は正真正銘、メイドを職業とする人達である。そうなればこの服装に誇りを持っていてもおかしくない。おかしくないが……

「街中で目立ちませんか？」

そう、気になるのはやっぱりそこだ。昨日の一件でも、やっぱりメイド服は目立つことを痛感している。そこでさらにメイドさんを三人追加すると……そりゃまあ、多くの人が「何だあいつは」って視線になるよね。

だが、自分のそんな疑問に対し、ご当主は笑って首を横に振る。

「いや、あんまり目立たないだろう。その理由は少し後になれば分かるはずだ。いや、こちらとしても久々に面白いことになってきている状況だね。ハイエルフの一件で暗い話題やうわさが多かったからこそ、その反動が大きいと見るべきだろうな。こちらとしても商売に面白い話でな、ぜ
ひこの流れには乗っておかないといけないところだ」

もう読めた。目立たなくなる&商売に面白い&このご当主が売っているものは布製品。つまりはメイド服の注文が殺到しているんだろう。トイさんとライナさんにメイド服を着せたのは、メイド服を来た女性はこうなりますよ、といった感じの広告効果を狙ったのかも。昨日の自分達はいい広告塔になっていたわけだ。そういう部分は、このご当主には初代からの商人の血が流れてい



ると見るべきだな。

「とりあえず、メイドさん三人をPTに入れるかどうかは数日後に決定しますと告げて、この日は館を後にした。明日はどうなるんだろうか……」



翌日、「ワンモア」にログインして軽い食事を済ませる。その後、昨日のメイド三人をPTに入れるかどうかをトイさんとライナさんに相談すべく、PTチャットを起動……しようとした直前に、ウイスパーパーチャットが飛んできた。

送り主は……ツヴァイか、エルフの村以来だな。何か問題でも発生したのだろうか？

『どうした？ 時間はあるから話せるぞ』

ウイスパーパーの要請を受け入れて声をかけると、ツヴァイからはこんな言葉が飛んできた。

『アース、正直に吐け。今度は何をやった？』

なんのこっちゃ？ 訳が分からない。これはどういう意味なんだ。

『話が見えないぞ？ 今度は何をやった、と言われても返答に困るのだが』

この質問に対し、ツヴァイからのご返答はこうだった。

『まだダークエルフの街の様子を見てないなら、宿屋から外に出てくれ。それで分かると思うぞ』

クエスチョンマークを頭に浮かべつつ、ツヴァイに言われた通り外に出てみると……

『メイドさんがいっぱい……?』

そう、道行くダークエルフの女性の四〇%ぐらいが、昨日までよく見た露出の多い軽装姿から一転して、紺色のロングスカートのクラシックなメイド服へと、服装を変化させていた。

『他のプレイヤーに聞いてみると、現実時間で朝だったときはこんなことにはなってなかったらしい。だが、昼間から徐々に増えて、今は見た通りの状態だ。こっちの世界の人にここまで極端な変化を起こせるのは、色々とわき道を突っ走っているアースぐらいだろ? だから何をやったんだとウイスポーを飛ばしたんだ』

——今回は自分よりも、メイドさんはロマンです、と力説したあのプレイヤーのせいなんだがなあ。それに、露出が少なくなっただから目のやり場に困ることも少なくなっただけで、いいことではないのだろうか? とりあえずツヴァイには、館での一件を細かく説明する。

『つてことで、今回の原因を作った責任者というなら、メイドさんはロマンだと力説した人だろ。う……名前は覚えてないが、一緒に館に入った面子は三〇人ほどいたから、自分が嘘を言ってもすぐバレる』

そもそも、メイドさんの服装をする人が増えたからって大した問題ではないだろうか? リアルでこうなったらそれは珍しいだろうけれど、仮想現実世界のこちらなら、一つの国における女性の礼服がメイド服であったとしてもおかしくはない。我ながら極端な例えだとは思おうが。

『そもそも、実害なんて特にはないだろう? メイド服のアバターなんて、ネットゲームではありふれたものだし。これだけ街の女性が揃いも揃ってメイド服を着ている光景はなかなか凄いものではあるがね。それに、一番最初に自分を疑ったのはなぜだい? 普段からわき道を突っ走っているっただけでは、説得力が少し弱いように思えるんだが』

これに対するツヴァイからの反論は……

『ノーラ、カザミネ、ロナが口を揃えて言ってたぞ? 「こんなことを引き起こすのは、アース君(さん)が何かやったはず」ってな。何で三人が見事にハモったのかまでは知らないけどよ……それと、実害というのには微妙なんだが……』

歯切れが悪いな。ツヴァイは一旦そこで言葉を切った後に、とりあえず言わないとなくと付け加えてから、続きを送ってきた。

『ミリーが「せっかくですし、メイド服を着てみるというのも面白いですね」と言っただけで、少し前に宿泊している宿屋を飛び出していった。それを見たエリザが「まさかミリーさん、メイド服で誘惑を!? そういえば我が国でも、結婚したい職業の相手ランキングの上位にメイドが入っていましたわね……!」とか何とか言っただけで、後を追うように出ていった。それだけでもかなり面倒なんだが』

まだ何かあるのか。とりあえずツヴァイの話の続きを静かに待つ。

『よりもよってレイジがボソッと「メイドか……いいな」とつぶやいたんだよ。質実剛健とまでは言わないが、こういった話に興味がなさそうな雰囲気。レイジがまさかの反応を見せたんだ。も

う予想できると思うが、レイジの彼女であるコーンポタージュまで飛び出していった。まるで伝染病のように、ギルドメンバーの中にコスプレメイドが増えそうな勢いなんだよ』

知らんがな。と切り捨てるのはあんまりか？　だが、本当にこうなったきつかけは自分じゃないからなあ。広告塔にはなつてしまったけれど、そんなことまで馬鹿正直にツヴァイに伝えるつもりはない。それにしても、レイジにもそんな面があったのか。ちよつとびっくりだ。

『話は大体分かったけどな、だからってこちらは何もできないぞ？　まあ今のようになつたりを受けてやるってぐらいだな。後はそちらで何とかしてもらうしかないなあ』

まあ、普段から女性に囲まれているんだから、ツヴァイに向けられる視線の量は大きく変わらないただろうしな。それにこれだけ街中にメイドさんが増殖すれば、メイド服を着ている方が逆に目立たなくなるかもしれん。木を隠すには森の中、って言葉もあるし。

『確かに、ギルドが内部分裂を起すってわけでもないから、そんなに怒っているわけではないんだが……それでも少し言いたくなつたんだよ……』

せいぜい影響があつたとしても、そのレベル止まりだろうな。

『むしろツヴァイは、メイド服を着たミリーとエリザに囲まれて、周囲にいる男性からキツイ嫉妬の視線を一身に受けるべきだ』

これぐらいは言い返してもいいだろう。昨日の自分は、こんな風にメイド服を着た女性が多くなる状態になる前に、メイド服姿のトイさんとライナさんに街の中を連れ回された。その影響で、嫉

妬どころか、暗転する世界の中で袋叩きにされる技を放たれそうぐらいのオーラを、多くの男性からぶつけられたんだから。

ついでに、自分に向けられたこうしたオーラの出所は、プレイヤーだけではなかつたとも付け加えておこう。

『ぐふっ』

あー、ツヴァイが吐血したか？　それでも昨日の自分よりはマシだろう。街にこれだけメイドさんが増えて、中には男性と腕を組んだりしている人もいる。そこにメイドが一人二人増えたって、もうほとんどの人が見やしない。

『ま、せいぜい頑張ってくれ。他に用事はないのか？』

この後、トイさんとライナさんにPTメンバーをどうするか相談をしないといけないし、そろそろ話を切り上げないといけない。

『あ、ああ。それとアース、ソロは気軽かもしれないが、たまには俺達のところ顔を出してくれてもいいだろ？　時々、何も言わずに引退したのかと不安になるぜ……ほつておくと、全然音沙汰がないからなあおさらな』

そのうちにな、と伝えてウイスパーチャットを終わらせる。

さて、トイさんとライナさんは新しいPTメンバーのことをどう思うかな。一応リーダーは自分だが、だからといって何の相談もせずメンバーを増やすのは問題だ。

【ちょっといいかな？ P Tメンバーの増員の相談があるんだが】
そうして自分が何気なく送ったP Tチャット。しかしライナさんからは……

【ごめんね、直接会って話をしないといけないことが出来ちゃったから、広場まで来てほしいの】
との返答が。声から判断するに、少々焦っている雰囲気か漂っていたのは間違いない。いったい何があったんだ？

【分かった、できるだけ急ぐ】

P Tチャットを切り、自分は全力で走り始めた。《大跳躍》や《フライ》を利用してのショートカットも駆使して、最短距離を突っ走る。そのお陰で、二分後には広場に到着することができた。

広場でライナさんを探すと……いた。二人の体格がよいダークエルフの男性と、何か話しているようだ。ここでまごついていても仕方がないから、とりあえずライナさんに声をかける。

「すまない、待たせた。いったい何があったんだ？」

自分の声に反応してライナさんが振り向く。

「ちょっと、困ったことが起きたの。あまり他の人の耳に入れたくないことだから、こっちに来てもらえない？」

ライナさんの提案を受け入れ、広場を出てしばらく歩いたところにある静かな喫茶店に、自分とライナさん、そして二人のダークエルフの男性が入る。ライナさんがひと言伝えると、マスターは頷いて店の奥に案内してくれた。どうやら、本当に他の人の耳がない場所を選んだようだ。

「前置きは省いて、理由だけ言うわね。トイ姉さんの父親……つまりエルフの長老様が体調を崩して倒れたという話が伝わってきたの」

なんだと!?

「トイ姉さんは、もうこの街を出てエルフの村に帰っている途中よ。P Tリーダーの貴方に断りもなく行動したのは申し訳なかったけど……」

当然、これはこちらが責めることではない。むしろ、そういう行動を取る方が正しい。

「気にしないでいい。というより、そういう事情があるなら、ライナさんもエルフ村に行った方がいいのではないか？」

二人は義理の姉妹かもしれないが、自分はそう提案した。するとライナさんも、この提案にすぐ乗ってきた。

「行っていいと言うのなら、お言葉に甘えさせてもらうね。その代わりに、私達が抜ける間はP Tに私の兄を入れて使ってくれていいから」

ライナさんの言葉に、二人のダークエルフの男性は苦笑いを浮かべている。

「了解した。さあ、ライナさんは早く行って」

ライナさんは、「ごめんね、この代金は私が出すから」と言い残して、あつという間に出て行った。

しかし、エルフの長老が倒れたとは……ハイエルフの一件による過労が原因かもしれないな。大事

ないというが。

「やれやれ、あんな荒っぽい妹ですまん、アース。お前のことは妹からよく聞いているから、自己紹介は無用だ。こちらの挨拶あいさつだけさせてもらうぞ。まず、俺はゼイだ。そしてこつちが」

「ザウ、という。どれだけの間組むことになるか知らんが、よろしく頼むぞ」

ゼイさんとザウさんか。まずは軽い挨拶を兼ねて握手する。二人とも身長が二メートル近くある上に筋肉質な体を持っているので、握手をすると自分の手がほぼ隠れてしまった。

「こちらこそよろしく願います」

自分も頭を下げて、そう挨拶をするが……ゼイさんとザウさんには不評だったようだ。

「硬い、硬いぞアース。PTメンバーなんだからもうちよつと砕けてくれていいんだぜ？」

「ゼイの言う通りだな、ここは公の場でもなんでもないんだぞ」

こう言われてしまった。むう、なかなか難しい注文だが、何とか頑張ってみようか。

「了解、何とかしてみよう。そして申し訳ないんだが、あと三人、PTメンバーを入れる予定になっている。当初はライナさん達とそのことについて相談するつもりだったんだがな、今回のようなことになった以上、PTリーダーである自分の意思で増やさせてもらうが、いいかい？」

自分の意見を、ゼイもザウも了承してくれた。その辺の考えは、PTリーダーの責任と権利だろうということだ。

「じゃあすまないが、そのメンバーと顔を合わせてもらいたいから、ついてきてほしい」

話の合間に飲んでいたのは紅茶ぐらいなものだった。これぐらいなら、ライナさんに出してもらっても問題はないだろう。

そうして喫茶店を後にして、例のメイドの館……じゃなくて、特製布を作っているご当主がいる館へとやってきた。

「おいおい、アース。お前さんはこのご当主様と知り合いなのかよ!？」

ザウにそう言われても、あえてスルー。呼び出し鈴を鳴らし、出てきたメイドさんに、PT加入の件です、と伝えるとすぐ中に通された。

「妹が『アース君は変な繋がりを作る天才』と評価していたが、なるほどな……」

ゼイがそんなことを言う。ライナさん、後で覚えておけよ……今回はご当主とは会わず、例の新入メイドの前に通される。

「「ようこそいらっしやいました、お話を伺います」」

「またも見事にハモる三名。すごいな。」

「今日からしばらく、自分のPTに加入してもらいたい。報酬は冒険者の流儀に従って、得た収入を均等分配する。それでいいかな?」

こちらの申し出に、三人は静かに頷いてから「問題ありません、これからよろしく願います、ご主人様」との答えを返してくる。